人権ほっと三十一年三月号

「労働力を呼んだのに、きたのは人間だった」

大阪教育大学教授
森　実

表題のことばは、スイス人のマックス・フリッシュが五〇年以上前に述べた言葉だそうです。ドイツでも、一九六〇年代にトルコなどから「ガストアルバイター」つまり「お客さん労働者」を大量に受け入れ、このことばが語られるようになりました。

ドイツにとって、必要だったのは単純労働などを担ってくれる労働者だったのです。数年たてば帰ってもらうことが前提でした。

ところが、トルコからやってきたのは、希望あふれる人たちで、送り出した人たちも、有望な人たちに行かせたのです。ドイツに来た若者たちは、夢をもち、幸せを願い、恋をして、家庭を築き、子どもを育て、政治にも関心を寄せるようになりました。

「人としての権利を保障する」という観点がないかぎり、外国人受け入れ拡大という政策は失敗するのです。

しかし、現在日本で進められようとしている政策では、「移民ではない」と首相などが繰り返し述べています。言い換えれば、そうした人たちが幸せを願ったとしても、日本でかなえられる保障はしないという宣言ともいえます。

仕事の場所があるなら、外国から来た人がまず困るのはことばでしょう。日本語は、おしゃべりは簡単ですが、漢字を使って書くとなれば難しくなります。そのような特徴がわかっているかどうかで、受け入れる隣人としての日本人は対応が違ってくるでしょう。また、ことばを学びたいという裏には、幸せになりたいという願いがあることも忘れてはならないと思います。

幸せを保障する制度を一方で求めつつ、わたしたちは隣人として、ことばを学ぶお手伝いをしつつ、お互いの夢や幸せについて考え、語り合いたいものですね。